



「気候文明史」

田家 康 著

日本経済新聞社，2010年2月

336頁，2600円（本体価格）

ISBN 978-4532167318

堅そうなタイトルですが，読み始めるとこのような多分野の内容を総合したような本があることに驚くとともに，思わず太古の世界に引き込まれてしまいました。ページ上の時代が移るにつれ，想像する大昔の気候に対する人類の生き方が何度も変わることとなりました。本書は当時の気候と人類の暮らしの詳細な痕跡をもとに，気候が人類に及ぼした影響を冷静に分析したものです。この本は巻頭で著者が述べているように，「なぜ民族が移動したのか，傑出した人物の個人的能力だけで大国は形成されたのか，どうしてある特定な時期に全世界で一斉に歴史の変化が起こっているのか。」と言う問題提起に，的確な筆力で応えている力作です。

最近，急速に進歩した技術がさまざまな分野で応用されることにより，古気候学が大きな進展を見せています。例えば分析技術の発達により，数十万年前の温室効果ガスの濃度だけでなく，当時の気温などもある程度推定できるようになっています。一方，DNA鑑定や同位体などをつかった年代同定や遺跡の発掘調査技術の進歩により，人類の祖先の移動や暮らしをたどる知識も長足の進歩を遂げています。そして，それらを組み合わせてみることにより，気候変化が人類の生活や文明に大きな変化を与えていることがわかってきました。この本は，これまでの研究からわかったグラフなどを示しながら，時代を追って気候の変化と人類の対応を，様々なエピソードを交えながら細かく対比させたものです。

本書は3部からなります。第1部「黎明編：気候変動が人類を育てた」では，有史以前の気候変化を人類の暮らしと共に解説しています。例えば，約9万年前に寒冷化とそれによる海面低下が人類の出アフリカやその後の世界各地への移住のきっかけとなったこと，約3万年前に寒さを凌ぐために毛皮を重ね着するための針と糸が発明されたこと，最終氷期後の一時的な寒冷化時の狩猟採取の行き詰まりが，やむなく人類を定

住，農耕・牧畜生活に追いやったことなどが経緯を含めて記述されています。また，興味深いことにノアの洪水伝説とそれによる農耕技術の各地への伝搬の関連の可能性にも触れられています。

第2部「古代編：気候変動が文明を生んだ」によると，メソポタミアでは気候変動による干ばつに対処するために大規模な灌漑設備を作る必要に迫られ，それが世界最初の都市国家を生み出しました。エジプトでは，気候変動によってファラオによるナイル川氾濫の予言が当たらなくなり，古王国は滅亡しました。その後の王朝は洪水を制御するとされる神の座には戻ろうとしなかったそうです。日本でも，温暖な縄文時代に三内丸山遺跡が繁栄しましたが，その後の寒冷化によって縄文中期文化は崩壊しました。温暖な弥生時代に入ってから水田耕作が広がり，時を同じくしてヨーロッパでも同様な気候によりローマ帝国が繁栄しました。しかし，その後寒冷化・乾燥化によって，大規模な民族移動などが引き金となってローマ帝国は滅亡し，さらに6世紀の世界的な飢饉と疫病によって「古代」は終焉しました。日本でも同時代に同様な気候変化が起こっており，仏教の伝来はそう言う時代を背景とした可能性も指摘されています。

第3部「中世・近世編：気候変動が歴史を動かした」では，中世温暖期に入って，ヨーロッパは発展し，日本でも平安文化の発展や藤原文化の台頭が起きたことが述べられています。しかし，その後の小氷期による寒冷化によって，世界中で大飢饉が発生しました。そして，それは日本を含めて世界中に飢饉，疫病，戦争を引き起こしました。一方，それに対応するための農業技術の革新や，新大陸から渡ってきたジャガイモなどの新しい環境に適した作物栽培が農業収穫を増やし，今日の人口増に貢献しています。このように，先史時代から近代まで通して人間と気候との関係を一貫して示しているのが本書の特徴です。

この本は，気候変化が起こって人類はどう対応したのかという記録でもあります。そしてその課題は，現在でも地球温暖化防止のような観点で，同じように人類に突きつけられています。温故知新，過去を紐解くことは，現在にも通じることではないでしょうか。この本を読んで，改めて過去の気候変動に興味を持つとともに，地球温暖化防止の啓発を行う際にも，気候の変化のみを示すよりも，そこに人類との関わりを交えることができれば，より多くの人に興味を持って人類の将来について真剣に考えてもらうことが出来るよう

になるのではないかと感じました。

なお、この本は巻頭に専門書ではないと断り書きがありますが、気候変動の原因や現象の説明も専門書なみに丁寧に記述されています。また、巻末には過去気候の分析法と気候変動を起こしうる主な要因をまとめた解説もあります。さらに、引用している知見についての文献も明示されています。そのため、この本で

気候変動を引き起こした現象を一通り理解できるとともに、これをきっかけとして、さらに興味を掘り下げることが出来る貴重な本になっています。最後に、この本の著者は農林中央金庫の職員でかつ気象予報士会東京支部長という経歴をお持ちであることも特記しておきたいと思います。

(水戸地方気象台 堤 之智)